『太平記抜書』の類（写本）書誌解題稿（上）

長坂成行*

要旨

中世末期から近世にかけての読者にとっても『太平記』の長編性は、通読の隘路となっていたようである。その一方、享受者の本作品への関心は強く、ために多くのダイジェスト版が案出された。粗筋・異文・人物・地名・語句・和歌などさまざまな関心からの多様な抜書が写本として存在する。小稿はそれら『太平記抜書』の類の総覧と書誌解題を行うものである。

はじめに

『太平記』のような長編の作品は、本文すべてを通読するのが困難なため、さまざまな種類の抄出本が作成され、その概要については加美宏氏『太平記享受史論考』（一九八五・五、桜楓社）などに詳しい。小稿は写本として伝わる多様な『太平記抜書』の類の総覧を試みるものであり、予定している『伝存『太平記』写本総覧』の粗稿の一部でもある。以下、『太平記抜書』の類を私に分類して、つぎのような順序で掲載する。なお『太平記絵巻』の類の中には『太平記抜書』としての性格を持つ本もあるが、ここでは扱わず『写本総覧』で触れることにする。

〔全巻の粗筋を要約した抜書〕
〔島津家本異文の抜書〕
〔『参考太平記』に関わる抜書〕
〔特定の地域・人物に関わる抜書〕
〔地名・人名等を総覧する抜書〕
＊（ここまで（上）本稿、以下（下）は『奈良大学大学院研究年報』第十三号に掲載）
〔語句に関する抜書〕
〔和歌などの抜書〕
〔部分的な抜書・断簡〕
〔古筆切〕
〔その他〕

各本について、おおむね以下の事項に言及する。

平成19年９月20日受理　*文学部国文学科教授

番号　所蔵機関（書名、通称または仮称）（必要あれば旧蔵者名）

（所蔵機関の整理番号）、【国文学研究資料館にフィルム・紙焼写真がある場合はその請求番号】、巻数、冊数。以下、書誌事項（装丁について、楮紙袋綴の場合は特記せず）、奥書・識語（私に読点を付す。／は改行、」は改丁を示す）、印記など。奥書・識語なき場合の書写年代は依拠目録などによる。内容上の特色については、先行論文などがある場合は簡略に記すが、従来言及がされていない抜書についてはやや詳しく述べることもある。

〔目録〕当該本の所在情報を載せる目録を示す。

〔翻刻〕翻刻を掲載する資料を示す。

〔参考〕当該本に関する参考文献を挙げる。雑誌等論文が単行本に再収された場合、原則として後者で示す。

（頻出する以下の文献は【　】内の略称で示す）

・高橋貞一『太平記諸本の研究』（一九八〇・四、思文閣出版）。→【高橋】

・加美宏『太平記享受史論考』（一九八五・五、桜楓社）。→【加美】

・小秋元段「国文学研究資料館蔵『太平記』および関連書マイクロ資料書誌解題稿」（国文学研究資料館調査収集事業部『調査研究報告』二六号、二〇〇六・三）。→【小秋元】

〔備考〕その他の注記事項。

〈全巻の粗筋を要約した抜書〉

1 蓬左文庫蔵（太平記抜書）

（整理番号　一〇五・三五）

写本一冊。

紺色表紙（二七・五×二〇・六糎）の左肩に「太平記抜書」と打付け書（金泥）、その下に「全」と朱書。楮紙袋綴、墨付九五丁。漢字片仮名交、一面一二行、字面高さ約二二・五糎。朱点・朱引あり。書き込みあり（朱・墨書）。目録なし、内題「太平記抜書」。『太平記』の筋書を摘記し巻の終わりに三字下げで「右一巻了」と記す（因みに巻一は一七行、巻二は二七行を使用）。和歌二字下げ一行書き。印記、冒頭丁右上に「御／本」（三・二糎方型単郭朱文）、右下に「蓬左／文庫」（四・〇糎方型単郭朱文）。前者は尾張藩初代徳川義直の印で、いわゆる駿河御譲本であることを示す。室町末近世初期写か。

本書について『御文庫御書物便覧』（『尾張徳川家蔵書目録 第九巻』〔書誌書目シリーズ49〕、一九九九・八、ゆまに書房）には、

「源敬様御書物／太平記抜書　寫本／真片假名　一冊／巻毎ニ少シツヽ抜書セシモノナリ、第廿二巻ハ脱セシ／マヽノ舊本ノ抜書ト見ユ、廿一ヨリ廿三ト次第シテ、廿一／ノ所ニ廿二モ此内ニコモルト記セリ」（一九六頁）

とあり、すでに巻二二を欠く本に依拠することが指摘されている（源敬様は徳川義直）。本書の底本が巻二二を欠く古態本のうちでも玄玖本

系統であることや、抜書の方法については〔参考〕加美氏論文に詳細な考察がある。また、本書が筋書以外に和歌・落首の類の掲載に熱心であったらしいことは〔参考〕島津氏論文にも詳しい。同種の筋書摘記の抜書には後掲の島原松平文庫本・小浜市立図書館本・長谷川端氏蔵本・高橋貞一氏蔵本などがある。

〔目録〕『名古屋市蓬左文庫國書分類目録』（一九七六・三）一二二頁下。

〔参考〕

・『蓬左文庫国書解説一』（一九六四・三）六七頁下に略解説（渥美かをる氏担当）。

・島津忠夫「落首・落書」（『解釈と鑑賞』三四巻三号、一九六九・三→『中世文学史論』（一九七八・一一、和泉書院）に再録。

・島津忠夫「金言和歌集」（『室町ごころ 岡見正雄還暦記念中世文学資料集』一九七八・九、角川書店）。

・青木晃「太平記抜書」（『室町ごころ 岡見正雄還暦記念中世文学資料集』一九七八・九、角川書店）。

・加美宏『太平記抜書』の類ノート」（【加美】第三章第一節）。

2 島原図書館松平文庫蔵（太平記抜書）

（整理番号　一一三・三）

写本一冊。

茶色渋引表紙（二九・六×一九・八糎）の左肩に題簽を貼るが虫喰多し。新補貼題簽に「太平記抜書」と墨書。楮紙袋綴。料紙に裏打ち多し。一オに内題「太平記抜書」。漢字片仮名交、一面一一行、字面高さ約二二・〇糎。朱点・朱引あり。江戸初期写、青木氏解題には「巻二六後半から手が変わるかとも考えられる」（五二三頁下）という。内容は蓬左文庫本に同じだが、梗概を記し終わった後に、二字下げで「右一巻ナリ」とするのが小異。印記、巻頭左下に「島原秘蔵」（長方型双郭朱文）、巻尾に「尚舎源忠房」（長方型双郭藍文）・「文／庫」（横長楕円双郭白文）、松平忠房（寛文九年〈一六六九〉に福知山から移封）の印。

〔目録〕『肥前島原松平文庫目録』（一九七二・一〇再版）九六頁。

〔翻刻〕青木晃「太平記抜書」（『室町ごころ 岡見正雄還暦記念中世文学資料集』、一九七八・九、角川書店）。

＊松平文庫本を底本にし、蓬左文庫本・小浜市立図書館本と対校。

3 小浜市立図書館蔵（太平記抜書）（『太平記評判』第三〇冊の内）

（整理番号　九一三・一七四）

『太平記評判秘伝理尽鈔』三〇冊のうちの三〇冊目（第一冊から二九冊までは『太平記秘伝理尽鈔』）。表表紙は剥落、後表紙は茶色、大きさ、二七・六×二〇・三糎。内題「太平記抜書」。楮紙で袋綴の穴跡あり、現在は上下二穴による仮袋綴。本文一面一〇行、漢字片仮名交楷書、朱引（人名中、地名右、年号左二重など）あり。墨付一二八丁。江戸中期写か。印記、一オ右上に「遠敷郡／雲濱圖／書館印」（方

型単郭朱文）。『目録』七頁によれば藩校順造館の蔵書は旧雲浜図書館に受け継がれた由。

〔目録〕『酒井家文庫綜合目録』（一九八七・一、小浜市立図書館）三〇八頁下。

4 長谷川 端氏蔵（太平記抜書）

『太平記評判』三三冊のうち、三二冊目。

黒茶色表紙（二七・五×二〇・五糎）、左肩に題簽剥落の痕あり。楮紙袋綴、見返本文共紙。一面一一行、字面高さ約一九・五糎、漢字片仮名交、楷書一筆書写、墨付一〇四丁。小口に「理尽　抜書巻」と墨書（右書き）。内題「太平記抜書」（四字下げ）と記す。その下に印記「孟坤／氏」（一・六糎方型単郭朱文）、巻末「右四十之巻終」とし、その下にも同印、印主未詳。この印記は『太平記評判』各冊にも捺す。本書は本文だけでなく、小字による注記や異文注記も蓬左本・松平本・小浜本に共通する所が多い。

5 高橋貞一氏蔵（太平記抜書）

原本未見。【高橋】二四四頁以下による。

写本一冊。

褐色表紙（二五・七×一七・九糎）、楮紙袋綴、江戸初期写、漢字片仮名交、一面一〇行。【高橋】二四四～二五三頁までの引文は、すべて蓬左文庫本『太平記抜書』に一致し、島原本・小浜本・長谷川本に類する一本と言える。

6 陽明文庫蔵（太平記大綱）

（整理番号　近・タ・二一）

原本未見、国文学研究資料館紙焼写真による。【小秋元】によれば書状を紙背とする横長綴本で大きさ不揃。内題「太平記大綱」。蓬左文庫本『太平記抜書』に同じ内容で巻三三途中で欠。

〔参考〕【小秋元】一二〇頁。

7 静岡県立中央図書館葵文庫蔵（太平記抄書）

（整理番号　九一三・四、二五）

明治一〇年（一八七七）写、一冊。

原装紺色表紙（二六・五×一七・九糎）、左上に原題簽（一六・九×四・〇糎）「太平記抄書　甲」と墨書。漢字平仮名交、一面九行、字面高さ約二二糎、朱および墨書にて書入れあり。墨付四七丁。見返しに「此書四十巻、文保二年より貞治／六年凡五十年也、／右軍書年号人名ト所在とを／□貳冊の巻に写畢、□□／見□候へ共、心得有之度候也／上之巻」と記す。裏表紙の見返しに奥書、「明治十年中夏／駿河国清水湊／深江仙助／写之（朱印「深江」）／但二冊之内」。一丁目オの目録上部に印記「静岡懸立／葵文庫／蔵書之印」（四・四糎方型単郭朱文）、下部に「大井博氏寄贈／大井文庫／昭和二二年五月三十日」（八・〇×三・〇糎長方形単郭朱文）、「深江」（一・一×〇・五糎長

方形単郭朱文。

一オ～二オにつぎのように目録を書く。「太平記巻第一目録　一二之内初編／○（朱）壱／一　後醍醐天皇御治世乃事并武家繁昌之事／○（朱）弐／一　中宮御産御祈の事并俊基偽籠居事（以下略）」から、巻一〇の「一　高時并一門以下東勝寺におゐて自害の事」まで。三オ以下、巻一から一〇までのいくつかの章段（この目録の表記の仕方で二〇段）を主にして、本文そのままではなく粗筋を摘記したもの（蓬左文庫蔵『太平記抜書』などよりは詳しい）。識語の「年号人名ト所在とを」とあるが、史的事実を重んじたものか、ややわかりにくい。「呉越軍事」に六丁分も使用しており、編者の意図は把握しづらい。「貳冊の巻に写畢」とあり、本書はもと二冊分であるはずだが、「乙」に巻一一以降巻四〇までを要約したか。とすれば第一部に重点を置いたものだろう。依拠本は流布本か。

〔目録〕『久能文庫目録 静岡県立中央図書館葵文庫』。

〔島津家本異文の抜書〕

8 国立公文書館内閣文庫蔵（太平記補闕）

（整理番号　内閣文庫一六七、七〇）

写本一冊。

濃褐色表紙（二七・二×二〇・三糎）の左肩に題簽あり「太平記補闕」と墨書。内題なし。墨付三三丁。漢字片仮名交、巻一の異文は一面一〇行、巻三以降は一面九行。

本書は林家に齎された薩州本と板本との異同を検した抜書で、その成立の経緯は〔参考〕に譲るが、本書のいう薩州本は島津家本とみなして大過あるまい。冒頭「儲王御事」から始まる。巻一の異文摘記の後（一九ウ）に「此一帖以薩州本補之、／寛文戊申九月　林學士」とあり、さらに巻三以降の異文一〇項目の後に「右十三枚以或本補之、或本亦為／薩州本乎、／延寶元年癸丑十月／林學士」と記しており、寛文八年（一六六八）と延宝元年（一六七三）の二回にわたって書写されたものである。巻八以降の摘記の箇所の前後には朱の注記あり。たとえば「太平記巻第八／▲摩耶城合戦事付酒邉瀬川合戦事」とある▲の部分に「此段板本ニ雖有之／因相違呈之」と朱書し、引用が終った後に「○是ヨリ足軽ノ射手ニツク」（大系二四〇頁後二行目該当）とあり、掲出場所が判るように配慮をしている。

印記、一オ上に「林家／蔵書」（方型単郭朱文）・「内閣／文庫／之印」（方型単郭朱文）・「日本／政府／圖書」（方型単郭朱文）、一オ右下に「淺草文庫」（長方形双郭朱文）・「内閣／文庫」（方型単郭朱文）、巻尾に「日本／政府／圖書」・「内閣／文庫」。

以下の『太平記抜書』『太平記抜萃』とあわせて、『参考太平記』以前の諸本対校の成果として貴重である。

〔目録〕『改訂内閣文庫國書分類目録 上』（一九七四・一一）二六五頁上。

〔参考〕

・加美宏「島津家本『太平記』異文抜書ほか」（【加美】第三章第一節）。
・長坂成行「島津家本『太平記』考」（『奈良大学紀要』八号、一九七九・一二）。
・田中正人「林鵞峰の『太平記』研究―『国史館日録』とその周辺から―」（『軍記と語り物』二六号、一九九〇・三）。
・長坂成行「島津家本『太平記』の出現―『太平記抜書』、薩州本との関係を中心に―」（『論集 太平記の時代』、二〇〇四・三、新典社）。

9 天理大学附属天理図書館蔵（太平記抜書）

（整理番号　二一〇・四　イ一三）

写本一冊。

白茶色表紙（二七・八×一九・三糎）、左肩に題簽剥落の痕あり。内題「太平記一部目録」、楮紙袋綴。墨付五七丁。漢字片仮名交。一面八行。巻末の奥書「延寶己未夷則念六偶得島津氏所蔵之本謄焉」。「延寶己未夷則念六」は延宝七年（一六七九）七月二六日。表紙右上に「眞年遺書」の書票を貼る。印記、一オ右上に「天理圖／書館蔵」（長方形単郭朱文）、右下に「牘庫」（分銅型双郭朱文）・「儉堂／圖書」（方型単郭朱文）・「和學講談所」（長方形双郭朱文）。「牘庫」は磐城平藩主で歌人・俳人内藤風虎（一六一九～八五）の印。「眞年」は国学者・系譜学者鈴木真年（一八三一～九四）、明治前期陸軍省・大学等に歴任。「儉堂／圖書」を『蔵書印提要』は辻 聴花とする（五九頁上）が未詳、あるいは辻守静（号耽花、国書人名三〇三頁A）か要後考。なお内閣文庫蔵元禄四年刊『参考太平記』四一冊（一六七・七五）、高橋貞一氏蔵貞享三年刊『難太平記』にも「牘庫」印あり（【高橋】三頁）、内藤風虎の軍記好尚のさまが察せられる。

本書は島津家本の異文抜書の一本。前半二四丁は島津氏所蔵本の総目録を載せ、後半二六オ～五七オは印本（板本）と比較しての同本の異文抜書である。巻一に異文が多く一九丁分を費やす。

同類書に神宮文庫蔵『太平記抜萃』・東京大学史料編纂所蔵『異本太平記纂』があり、内容・奥書とも一致する。本書に先行する抜書として内閣文庫蔵『太平記補闕』（寛文八年〈一六六八〉・延宝元年〈一六七三〉写）がある。本書の底本である島津家本は、島津家文書のひとつとして近年東京大学史料編纂所の蔵に帰した。

〔目録〕

・『竹柏園蔵書志』（一九三九・一、巌松堂書店）四一頁。
・『天理図書館稀書目録　和漢書之部第二』（一九五一・一〇）五二頁下。

〔翻刻〕青木 晃「天理図書館蔵『太平記』抜書」（『青須我波良』一〇号、一九七五・五）。

〔参考〕前掲、内閣文庫蔵『太平記補闕』に同じ。

10 神宮文庫蔵（太平記抜萃）

（整理番号　八九一）【国フ34―343―4、紙E356】

写本一冊。

水色表紙（二八・六×一九・〇糎）の左肩に題簽を貼り「太平記抜萃嶋津本全」と墨書、右にラベル貼付、その下に「三拾号」と記す。楮紙袋綴。漢字片仮名交、一面九行、字面高さ二〇・〇糎。墨付五五丁。巻末の奥書「延寶己未夷則念六、偶得嶋津氏所蔵之／本謄焉」とあり天理図書館蔵本に同じ。その末、ノド近くに朱筆小字で「勤思邑井敬義藏」とあり。印記、巻頭右下に「勤思／堂」（円型単郭朱文）、その隣に「林崎文庫」（長方形双郭朱文）、欄上右に「林崎／文庫」（方型単郭茶褐色文）、裏表紙見返し末に「天明四年甲辰八月吉旦奉納／皇太神宮林崎文庫以期不朽／京都勤思堂村井古巌敬義拜」（長方形単郭朱褐色文）。天明四年は一七八四年、村井古巌（一七四一～八六）は生前伊勢内宮の林崎文庫に、没後は仙台塩釜神社に蔵書が献納された蔵書家。村井古巌については佐藤喜代治「村井古巌のこと」（財団法人日本古典文学会編『訪書の旅 集書の旅』、一九八八・四、貴重本刊行会）、また『林崎文庫／鹽竈文庫 村井古巌奉納書目録 下』（二〇〇〇・三、皇學館大学神道研究所）の谷 省吾「村井古巌伝」など参照。

本書は島津家本の異文抜書の一本、天理図書館蔵『太平記抜書』と同じといってよいが、一面行数や、章段名の「付けたり」にあたる部分を小字双行書にするなどの小異があり、天理本とは親子あるいは兄弟関係か。前半二〇丁に島津家本の総目録を載せ、後半三五丁は島津家本との異文抜書。

〔目録〕

・『林崎文庫／鹽竈文庫 村井古巌奉納書目録 上』（神道書目叢刊 六）（一九九四・三、皇學館大学神道研究所）一三三頁。

・『神宮文庫図書目録』（一九一四、神宮司庁）三五六頁下。

・『神宮文庫所蔵 和書総目録』（二〇〇五・三、戎光祥出版）四一九頁左。

11 東京大学史料編纂所蔵（異本太平記纂）

（整理番号　二〇四〇・四、一一六）

写本一冊、原蔵彰考館文庫、謄写明治一八（一八八五）年、四四丁、二七糎、延宝七年七月島津氏所蔵本写。

横縞表紙の左肩に題簽（双辺）を貼り「異本太平記纂　全」と墨書、見返し左端にも同じく「異本太平記纂　全」とあり。一オに内題「太平記一部目録」とし、その後に巻一から四〇までの総目録あり（巻二二なし）、一つ書きなし、「付」部分は小字双行表記。一九オから異本の抜書を始める。「太平記巻一　儲王ノ御事ノ段／二ノ宮モノ次／△師親王ト申シハ西園寺ノ庶子冷泉ノ宰相中将中将、・・・」とあり、内閣文庫蔵『太平記補闕』の一オ末尾からに該当。奥書は天理図書館本などに同じで、その後に「明治十八年七月編修副長官重野安繹關東六縣／出張ノ時、水戸彰考館文庫主管者津田信存ニ託／シ、其館本ヲ以テ謄寫ス」とある。印記、遊紙ウ中央に「東京帝／國大學／圖書印」（方型単郭陽刻）、一オ右下に「修史／局」（長方形単郭陽刻）。

〔目録〕『東京大学史料編纂所図書目録 第二部和漢書写本編5（謄写本

〔下之二〕)』（一九七〇・三）七六頁左。

〔備考〕本書のもとになった彰考館文庫蔵『異本太平記纂』（写本一冊、整理番号　丑二二、『彰考館図書目録』八五頁掲載）は焼失。

『参考太平記』に関わる抜書

12国立公文書館内閣文庫蔵（軍記抜書九種のうち、参考太平記抜書）

『軍記抜書九種』（整理番号　二一四・三四）【国フ19－64－1－6】

写本二六冊。全冊の構成以下の如し。

第一冊　参考保元物語抜書
第二冊　参考平治物語抜書
第三冊～第六冊　平家物語抜書
第七冊～第一二冊　源平盛衰記抜書
第一三冊　盛衰記抜書
第一四冊～第二二冊　参考太平記抜書
第二三・二四冊　写本太平記参考太平記見合抜書
第二五冊　明徳記抜書
第二六冊　応仁記抜書

まず、『参考太平記抜書』について。全九冊（巻一～八）（巻九～一二）（巻一三～一五）（巻一六・一七）（巻一八～二二）（巻二三～二六）（巻二七～三一）（巻三二～三五）（巻三六～四〇）。

淡土色（上中下に刷毛目横縞模様）表紙（二九・五×二一・〇糎）の左肩に「参考太平記抜書自一至八 共四十八」の如く外題を打付書。各冊右上に題簽（子持枠）を貼り「軍記抜書九種　共二十六冊」と墨書。扉左肩に「参考太平記抜書従一／至八」の如く記す。楮紙大和綴。一オに目録題「参考太平記　一」とし、以下二丁半目録を記す（一つ書きなし）。漢字で一オは一面一二行、以下は一一行。段名の下に丁数を書く。四オから本文に入る。漢字片仮名交、一面七行。印記、一オ右下に「淺草文庫」（長方形双郭朱文）、同上に「日本／政府／圖書」（方型単郭朱文）。

巻二冒頭を引用して本書の体裁を示す。

参考太平記巻二／南都北嶺行幸講堂供養附大塔宮習武芸段／四十八箇所ノ箭甲冑ヲ帯シ辻辻ヲ固ム・・・・／天正本云／正中元年甲子三月二十三日石清水ヘ行幸ナル・・・・蔵人ノ頭藤房ハ櫻ノ下襲ニ蘇黄ノ布ヲ著セラル（以下略）

こうした形で本文そのものを抄出する。梗概書作成や異文への着目ではなく、おそらく装束・武具など有職関係への興味に基づく抜書かと推測される。

〔目録〕『改訂内閣文庫國書分類目録 上』（一九七四・一一）二六五頁下。

〔参考〕

・長坂成行「『写本太平記／参考太平記 見合抜書』解説、付『軍記抜書九種』覚書」（『奈良大学紀要』二一号、一九九三・三）。

13 国立公文書館内閣文庫蔵（軍記抜書九種のうち、写本太平記／参考太平記 見合抜書）

『軍記抜書九種』（整理番号　二一四・三四）【国フ19－64－1－7】

以下、『写本太平記／参考太平記 見合抜書』について。写本二冊。

淡土色（上中下に刷毛目横縞模様）表紙（二九・五×二一・〇糎）の左肩に「写本太平記／参考太平記 見合抜書／　自一巻廿巻迄（自廿一至四十巻）」の如く外題を打付書。右上に題簽（子持枠）を貼り「軍記抜書九種　共二十六冊」と墨書、右下に「共四十八」と打付書あり。扉中央に「寫本太平記／参考太平記　見合抜書／右一巻ヨリ廿巻マテ」の如く記す。楮紙大和綴。一面九行、漢字片仮名交。異文およびその丁数を朱で示す。印記、一オ右下に「淺草文庫」（長方形双郭朱文）、同上に「日本／政府／圖書」（方型単郭朱文）。

本書はある写本と『参考太平記』との校異を示したもので、全四〇巻一二八箇所に及ぶ。その表記方法は、

参考一巻／頼員回忠事ノ内／廿七丁 去程ニ明レハ元徳元年九月十九日ト有リ 年号ナシ 廿二丁（傍線部は朱）（大系四九頁該当）

の如くで、丁数まで明記して（朱が異本の丁数）異文箇所を示す。ところで本書の下冊奥に「一 参考ノ内／雲景未来記／北条家金勝院本無此段トアリ／足利義詮上洛／金勝院本西源院本無此段トアリ／右二箇条ハ寫本之方ニ全躰無之」との注記があり、この条件を満たす写本は玄玖本・神宮徴古館本の系統に限定されるのだが、〔参考〕で触れたように、異文の具体や丁数を勘案すると、この写本に符合するものは管見の限りでは知見なく、今日知られていない玄玖本系統の一写本の可能性が高い。

〔目録〕『改訂内閣文庫國書分類目録 上』（一九七四・一一）二六五頁下。

〔翻刻〕

・長坂成行「国立公文書館内閣文庫蔵『写本太平記／参考太平記 見合抜書』翻刻」（『奈良大学紀要』一九号、一九九一・三）。

〔参考〕

・長坂成行「『写本太平記／参考太平記 見合抜書』解説、付『軍記抜書九種』覚書」（『奈良大学紀要』二一号、一九九三・三）。

14 国立公文書館内閣文庫蔵（百鶉集のうち、参考太平記抜書）

（整理番号　二一七・三）

『百鶉集』二三冊の第一六冊目の末尾一一丁分が『参考太平記』からの抜書。

表紙（二二・九×一六・四糎）の左肩に双郭刷題簽を貼り「百鶉集」と印刷。右上に「疑問考實／雑識／雑考／秘笈目録」と墨書。目録なし。『参考太平記』の部分、漢字片仮名交、一面八行。印記、巻頭および最終丁に「日本／帝國／圖書印」（方型単郭朱文）・「日本／政府／圖書」（方型単郭朱文）。

本書の内容、一例を引文する。

巻二十一／丈　修理権大夫貞顕越後守／顕時子／増鏡云々セメテモ六波

羅近クトテ六条殿へ本院／後伏／見新院花／園春宮・・・檜皮屋一ツアルニ、両院春宮参ラ／セ給フ七十／四丈元弘元年八月廿七日・・・・

こうした形で約二〇箇所を抄出するが、意図未詳。北条氏・皇統への興味か。

〔目録〕『改訂内閣文庫國書分類目録上』（一九七四・一一）一二一頁上。

15国立公文書館内閣文庫蔵（太平記綱要）

（整理番号　一六八・八〇）

享保七年写本一冊。

灰色表紙（二九・二×一九・七糎）、左肩に「太平記綱要 全」と打付け書、内題は「参考太平記綱要」。厚ボール紙製帙に「参考太平記綱要」とあり。楮紙袋綴。墨付一一五丁。一面七行、漢字片仮名交、楷書。朱読点、朱引あり。印記、一オ右下に「淺草文庫」（長方形双郭朱文）・一オ右上に「書籍／館印」（方型単郭朱文）・一オ左下および巻尾左下に「内閣／文庫」（方型単郭朱文）・一オ右中および巻尾左上に「日本／政府／圖書」（方型単郭朱文）。

奥書「享保七年壬寅冬十一月十八日東都／右内史臣下田幸大夫師古奉／命考訂十二月二十四日詣　闕進之」とあり、享保七年（一七二二）徳川吉宗が下田師古に命じて撰進させたもの、〔参考〕福井氏は「これより先、吉宗は享保六年五月、右筆に命じて水戸藩の『参考太平記』を新写させているから、本書はその記事の検索に備えるために編集したものであろう」とし「本の体裁からみて紅葉山文庫旧蔵本であろう」という。

本書は『太平記』の巻毎の記事の要約、巻二二の分あり。その体裁は、例えば巻一冒頭、「人皇九十五代後醍醐天皇ノ御宇ニ當リ／テ、武臣相模守平高時武威ニ伐（ホコ）リ、朝憲ヲ／蔑（ナイガシロ）ニシテ奢リ甚シキニ因リ、天皇密（ヒソカ）ニ近／臣ニ命シテ彼レヲ亡サレン事ヲ謀リ、武士ヲ／カタラハル、其ノ内土岐頼員此企ヲ妻ニ／語ル、妻又父利行ニ告ク、利行ハ六波羅ノ／奉行タルユヘ、頼員ヲ諫メ、六波羅常盤駿／河守ニ訟フ、因テ」の如し。

〔目録〕『改訂内閣文庫國書分類目録上』（一九七四・一一）二六四頁下。

〔参考〕

・森潤三郎『紅葉山文庫と書物奉行』（一九七八・二、臨川書店）二九五頁。

・秋元信英「書物奉行下田師古の事蹟―『儀式』研究史の一節として―」（『国学院雑誌』七二巻一〇号、一九七一・一〇）。

・福井保『江戸幕府編纂物　解説編』（一九八三・一二、雄松堂出版）一七九頁、同『江戸幕府編纂物　図録編』二七頁下に巻尾の図版（六七）あり。

・長坂成行「『写本太平記／参考太平記見合抜書』解説、付『軍記抜書九種』覚書」（『奈良大学紀要』二一号、一九九三・三）。

16内藤記念くすり博物館蔵（参考太平記抜要）

（整理番号　四七四九一）

写本一冊。

一帙に収納、帙左肩に白題簽を貼り「47491参考太平記抜要」と墨書。小口に「参考太平記抜要」と記す。改装包表紙焦茶色地布茜色模様表紙（二三・五×一七・〇糎、本文料紙より大きい）、外題なし。見返し（本文共紙）に「伊勢貞丈先生／参考太平記抜要／稲葉通邦蔵本」と墨書。旧紙面（二〇・四×一四・〇糎、これが伊勢貞丈筆か）に新用紙（二二・八×一六・七糎）で裏打する。一オから始め、「参考太平記常陽水府」として凡例および引用書を二ウまで書く（省略あり）。覚書、メモ的な文字で一面行数まちまちだが一二～一四行、漢字片仮名交、墨付七〇丁。所々に朱の書き入れ、追記あり。

一オ右上に印記「内藤記念／くすり／博物館」（二・〇糎方型単郭朱文）。巻尾に「稲葉通邦本」と墨書。

本書は『参考太平記』の抜書で、丁数を記し引用箇所を明示するのが特徴である。例えば、「巻之一／頼員回忠ノ条ニ／〔二十七／段右〕卯刻ニ軍勢雲霞ノ如ク六波羅へ馳参ル、小串／三郎左衛門尉範行山本九郎時綱御紋ノ旗／ヲ賜リ討手ノ大将承テ　中略」。以下こうした形で参考本から抄出する。その掲出箇所は有職関係の記述に関するものかと推察され、特筆すべきは国立公文書館内閣文庫蔵『写本太平記／参考太平記見合抜書（軍記抜書九種のうち）』の、異文掲出箇所とほぼ一致することで、本書は『写本太平記／参考太平記見合抜書』作成のための基礎資料と見なしてよいだろう。〔参考〕旧稿の段階では本書の存在を知らず、『写本太平記／参考太平記見合抜書』は伊勢貞丈あたりの故実家の仕事か、と推定しておいたがこの抜要によってそれが裏付けられることになろう。なお末尾三丁分は『太平記』中の記事の年次考証をめざしたもので、巻一から始まり巻二の「七月十一日捕俊基下向関東」で終わっている。また本書が、国立国会図書館蔵宝徳本『太平記』の書写者である稲葉通邦蔵本であるのも興味深いものがある。故実家伊勢貞丈（一七一七～八四）と尾張の学者稲葉通邦（一七四四～一八〇一）との関係については未勘。

〔目録〕

・『大同薬室文庫蔵書目録附館蔵和漢古典籍目録』（二〇〇一・三、内藤記念くすり博物館）一四二頁左。

〔参考〕

・長坂成行「『写本太平記／参考太平記見合抜書』解説、付『軍記抜書九種』覚書」（『奈良大学紀要』二一号、一九九三・三）。

17水府明徳会彰考館文庫蔵（参考太平記凡例藁本）

（整理番号　丑二一二）【国フ32－17－2、紙E613】

原本未調査。国文学研究資料館の写真による。

写本一冊。表紙左肩に題簽を貼り「参考太平記凡例藁本」と墨書、余白に「丑」印（方型単郭朱文）を捺す。内題「凡例二十三條」。一つ書きで二三箇条を記す。本文八行一五字、注双行小字、朱点・朱引あ

り。一オ右肩に「石尾七兵衛殿ヨリ／出ル」と記した押紙あり。一〇オに「次第ノ前後編直シ候事／重テ可書加」と墨書、草稿であることを示す。同ウに殿法印良忠に関する双行注記あり。但野正弘氏によれば、本書は佐々宗淳自筆という（〔参考〕一八八頁）。刊行された『参考太平記』凡例とは少なからざる異同があり、西源院本の旧蔵者に関する情報はこれによる。

〔参考〕

・但野正弘『新版佐々介三郎宗淳』（一九八八・七、水戸史学会）。

・長坂成行「水戸史館の『太平記』写本蒐集の一齣―金勝院本・西源院本を中心に―」（『軍記と語り物』三八、二〇〇二・三）。

18辻　善之助博士蔵（参考太平記抜文）

原本未見。新井白石著一巻。

宮崎道生『新井白石の研究』（一九五八・一、吉川弘文館）□頁による。

〔特定の地域・人物に関わる抜書〕

19国立公文書館内閣文庫蔵（摂津徴のうち太平記抄録）

（整理番号　和三六五九五、一五一（一一一）・二一八・三八）

摂津徴の内、第一一一冊太平記抄・応仁記抄と合綴。

格子縞模様表紙（二六・五×一九・〇糎）。左肩に双辺刷題簽「攝津徴　巻百十一」。一丁目表に「攝津徴／外集／夏部／太平記／應仁記／大阪　浅井幽清　稿」とあり。漢字片仮名交、楷書、一面一〇行。書入なし。印記、巻首上右に「地誌備用／圖籍之記」（長方形単郭朱文）、「日本／政府／圖書」（方型単郭朱文）、前者は内務省地理局地誌課の印。

本書は『太平記』『応仁記』から摂津関係記事を抽出したもの、『太平記』に関しては墨付二七丁で、「〇攝津國葛葉ト云處ニ地下人代官ヲ背テ合戦ニ及フ事アリ」（大系四九頁相当）から、「〇光厳院禅定法皇ハ正平七年ノ比云云、只順覺ト申ケル僧ヲ一人御供ニテ（下略）」（同四五九頁相当）まで、四六項目に及ぶ。どの巻からの抽出かの注記はなく、〇を付して年代記的に立項する。例えば、第二項目、

〇元徳二年三月二十七日ニ比叡山ニ行幸成テ大講堂供養アリ云云、住吉神主津守國夏太／鼓ノ役ニテ登山シタリケルカ、如何ナル仔細ニヤ（下略、大系五九頁相当）

と始める。巻二の「南都北嶺行幸事」の、出仕に遅延した津守国夏が獅子の太鼓を投げ打ちにする場面、「山ノ端ノ梢ヲ見コス辛崎ノ松ハ一木ニ限ラサリケリ」「契アレハ此上（ママ）モ見ツ云々」二首の歌（新編全集六六頁相当）を載せるなど天正本・毛利家本に載る記事を引くが、これは住吉社家の立場からの興味でもあろう。毛利家本などとは用字が異なり、毛利家本そのものからでなくおそらく『参考本』からの引用であろう。

浅井幽清は摂津住吉社家の人、平田篤胤門の国学者、嘉永四年（一

八五一）生れ。『攝津徵』第一五一冊総目録の末尾に浅井幽清の識語の押紙あり（明治一九〈一八八六〉年一一月在東京）。

〔目録〕『改訂内閣文庫蔵國書分類目録 上』（一九七四・一一）八〇頁下。

20 多和文庫蔵（太平記抄）

（整理番号　九・六）【国フ271－137－9－6、紙N2899】

原本未見、【小秋元】および国文学研究資料館の写真による。

横縞模様表紙の左肩に題簽（双辺）を貼り、「水月古鑑抄　烈女集抄　久米家古文書／七条家記　小神野物語拾遺　太平記抄」と記す。この六編からなる抜書集一冊。「太平記抄」は「崇徳帝御事」とし（一つ書きなし、一字下げ）「今年の春筑紫の探題・・・」で始まり「儀なる事共なり」で終り（巻三三相当）、「太平記細川系図繁氏延文三年六月九日於讃州卒去」とある（二丁分）。「細川清氏討死附西長尾城没落事」は「讃岐には細川相模守清氏と・・・」から「・・・細川右馬頭にそ靡き従ひける」まで（巻三八相当）の本文を抜書する（六丁半）。漢字平仮名交、一面一一行。讃岐白峯関係記事の抜書である。印記、一オ（内題「水月古鑑」とある）の欄上に右から①「不敢許出家門」（長方形単郭陽刻）・②「集古／清玩」（方型双郭陽刻）・③「多和／文庫」（方型単郭陽刻）、右端中ほどに④「香木舎文庫」（長方形双郭陽刻）、右下に⑤「平氏／文庫」（方型単郭陽刻）。②③④は松岡調（多和神社祠官、一八三〇～一九〇四）の印。⑤は梶原藍渠（一七六二～一八三四、讃岐高松の豪商にして和漢の学に通ず）の印か。

〔目録〕『多和文庫蔵書目録　上』（『言語と文芸』七九号、一九七四・一一）一七四頁。

〔参考〕【小秋元】一二二頁。

21 神宮文庫蔵（太平記抜書）

（整理番号　八九〇）【国フ34－343－3、紙E3560】

写本一冊。

格子模様渋引表紙（二七・五×一九・五糎）、左肩に双辺刷題簽（一六・八×三・五糎）を貼り「太平記抜書 全」と墨書。扉中央に「太平記抜書」、左下に「金鼓山光明禅寺」。首題「太平記二十巻二十四丁目有之／奥州下向勢逢難風事」。本文墨付六丁。漢字平仮名交、一面一二行。字面高さ約二二・〇糎。巻末識語「奥州住人結城上野入道道忠者、光明寺開山月波恵観和尚之／慈父也云々、吹上舊跡雁塔ニ五輪之塔有之、法名君山道忠大禅定門／十一月念一日逝去也、石塔過去帳ニ分明記有之、但シ年号不知、／且又白川ヨリ来ル沙弥道忠半切紙ノ状二通光明寺ニ有之」（六オ）。印記、扉右上に「神宮／文庫」（方型単郭朱文）。

内容は結城宗広（道忠）の悶死を記した巻二〇の最後の二章段「奥州下向勢逢難風事」「結城入道堕地獄事」からの抜書で、本文は流布本に同じ。本書は結城宗広の墓がある伊勢国光明寺の関係者による所為であろう。三ウ二行目「罪障深重の人多しといへ共」から四オ最終行

「鉄網四方」にかけて、朱線で本文を囲む。

〔目録〕

・『神宮文庫図書目録』（一九一四・三、神宮司庁）三五六頁下。

・『神宮文庫所蔵和書総目録』（二〇〇五・三、戎光祥出版）四一九頁左。

〔参考〕

・加美宏「島津家本『太平記』異文抜書ほか」（【加美】第三章第一節）。

22 加美宏氏蔵（太平記畑氏談）

写本一冊。

香色地栗色刷毛目縦波模様表紙（二四・五×一七・五糎）の左肩に題簽（一五・五×三・〇糎）を貼り、「太平記畑氏談　全」と墨書、「全」とある下に印記「三輪田／蔵書」（一・八糎方型単郭朱文）。楮紙仮綴。内題「太平記畑氏談（ハク（ママ）シタン）」。墨付一八丁。漢字片仮名交楷書。一面一二行、字面高さ約二二・〇糎。付訓（片仮名）あり、朱筆書入れ、朱の読み仮名もあり。印記、内題下に「梅迺舎／蔵書印」（二・七糎方型単郭朱文）、見返し左下および後表紙見返し下に「忘水」（三・二×二・一糎楕円型単郭朱文）、後表紙見返し下に「忘水？珎蔵」（九・五×四・八糎楕円変形単郭朱文）あり。印主未詳。

奥書「右畑氏談者太平記第二十二ニ出ル所也、最文面／雖レ濃其姓氏不レ委、其上忠誠無二之勇士乎、悪／業無道ト判ス、是佛者之誹言ニ而、武道之本意ヲ／不レ辨者カ、今其姓氏乎聞傳、而一部之内之／擧ニ武功一、禿筆之加ニ参考一令ニ判談一者矣、／于時寶暦五乙亥季／晩春吉日　東播山人／叟莱子述」。これによれば宝暦五年（一七五五）三月の成立。東播山人、叟莱子は未詳だが、本書の末尾近くに畑氏の子孫が高須を名乗り江戸時代に酒井氏に仕え、寛延二年（一七四九）酒井氏の姫路転封に従い、後に高須隼人廣長として重用されたとあり（翻刻下四三頁）、加美氏は播磨に住む畑氏の子孫の一人と推測することも出来ようとする。

表紙見返しの下半面の識語、「按太平記第二十二巻は康〔『應』を見せ消ちにして〕永の比足利直義の命により〔『忌憚に觸れ』―傍線部右に傍書〕／喪失したり、其内容は窺知し得さるも、或は脇屋義助／の勝軍の事ともいふ人あれと、恐くは第二十二巻にて一／先づ纏め、この書に記せる「中古武家興廃並に諸／士批判之事」の記入ありしならんか、／又、按太平記畑氏談とは鴻の巣氏談、又は高須氏談／と異なり、畑氏の祖先よりの言ひ傳へ談なるへければ、／「中古武家興廃並に諸士批判」／の項は太平記の何れの處にか存せ／しものならん、「中古武家興廃」は太平／記にあるを潤色したるものと思はるゝも、／「諸士批判」の項は恐くは第二十二巻にあ／りしを潤色したるならんか、さあらんには／直義の忌憚に触れしならむ／梅迺舎秘蔵之印」。

同上半面には「高須与力／石川武左衛門／吉沢列平／刀祢川六太夫／櫻井市郎次／三雲卯左衛門／〔一行あけて〕／新田左中将義貞之四天王／栗生左衛門／篠塚伊賀守／亘理新左衛門／畑六郎左衛門時能」とある。

後表紙の見返しに識語、「重按太平記第二十一巻乃至第二十三巻に載せる畑六郎左エ門／最期の記事について、畑氏の子孫ガ筆者に対して義憤を感せ／し事はさもあり得べき事にて、この義憤によりて畑氏の子孫／が太平記を批判し暗誦して、右太平記畑氏談を子々孫々／に言ひ傳へたるものなるべし、／太平記編纂せられしより宝厂に到るまて約三百六十余年、宝厂／より明治四十五年に到る約百六十年なり」。表裏各見返しの識語は同筆、明治四五年乃至大正元年（一九一二）の時点での記入。

本書は以下の五章段から成る。

○中古武家興癈并諸氏批判之事
○新田義貞武功并三井寺責附リ畑時能勇力之事
○畑時能軍勢ヲ語フ并ニ義貞自害之事
○越前鷹巣ノ城責并畑時能以下討死之事
○北國静謐并ニ畑氏子孫繁昌之事

加美氏が指摘するように、本書は『太平記』作者による畑時能批判に対して、反批判を試み時能擁護を目的にしたものである。はやくに紹介・翻刻されたが、その後本書を対象として何らかの言及がなされたかは、寡聞にして知らない。本書を手懸りにしての『太平記』欠巻部の内容推定の問題も含めて、加美氏解題を承ける発展的研究が望まれる。

〔翻刻〕

・加美 宏「太平記畑氏談（上）（解題）（翻刻）」（『古典遺産』一六号、一九六七・二）。
・同「太平記畑氏談（下）（翻刻）」（『古典遺産』一七号、一九六七・一二）。

23三宅久美子氏蔵仲光家文書（太平記巻之第十三之内抜書）

【国フ、ミ3-5―14】

原本未見。【小秋元】、および国文学研究資料館の写真による。

表紙左肩に「太平記巻之第十三之内抜書」と記す。内題「太平記巻第十三」、「龍馬進奏事」「藤房卿遁世事」の二段を抜書する。漢字片仮名交、一面一一行。後見返に「大正拾肆乙丑載仲呂吉日」とあり。

24水府明徳会彰考館文庫蔵（藤房卿略伝附太平記第三）

（整理番号　丑一七）【国フ32―200―12―2、紙N852】

原本未見。【小秋元】、および国文学研究資料館蔵紙焼写真による。

写本一冊。表紙左肩に題簽を貼り「藤藤房卿略伝 附太平記第三」と墨書。右肩にラベル「丑・拾七」。内題、一オに「萬里小路藤房卿畧傳」。二オに「萬里小路家畧系 諸家大系圖所載」として系図半丁、二ウに「萬里小路藤房卿肖像縮圖 土佐光信筆岩倉山大雲寺蔵板」とし肖像画あり。三オに「三公畧傳・宣房卿・藤房卿・季房卿」として永仁四年から康暦二年までの年譜八丁あり。つぎに、「潛龍閣」（柱刻上部）とある罫紙（一〇行）に「太平記第三／後醍醐天皇御没落笠置之条」「太平記十三／藤房卿遁世の条天正本」「異本太平記同条に流布本」として、巻三・一

三の記事を抜書（計三丁）。漢字平仮名交。つぎに「進奏龍馬来吉凶辞／藤原藤房卿」と題し巻一三の抜書。漢字片仮名交、八行、六丁。以下、罫紙に『櫻雲記』『吉野拾遺』などの藤房関係記事を抄出。潛龍閣は第九代水戸藩主徳川斉昭（一八〇〇～六〇）の号。

〔目録〕『彰考館図書目録』（一九七七・一一、八潮書店）六五頁。

【地名・人名等を総覧する抜書】

25 水府明徳会彰考館蔵（在名類例鈔）

（整理番号、丑二二）【国フ32－210－1、32－210－2、紙N869】

刊本写本合綴一冊。

表紙（二九・〇×二〇・四糎）の左肩に打付書「太平記系圖／在名類例鈔」。その下に「丑」印。右上に「丑　弐弐」の蔵書票を貼る。前半は整版、一オ内題「太平記之時代帝王畧系圖」とし、天皇家系図・南帝之年号・北条家之系図・新田足利之系図・新田之系図・足利之系図・仁木之統の系図を示す（九丁分）。改丁して内題「太平記評判在名類例鈔」、つぎに一巻から巻四〇までの地名（一面九行三段組み、読みはルビ形式で片仮名）国名を記す（いくつかに朱合点あり）。巻一〇・二〇・三〇の末尾に尾題「太平記評判在名類例鈔終」とあり、巻一一・二一・三一の初めに内題「太平記之時代帝王畧系圖」とある。巻四〇の奥に刊記「明暦元乙／未年 五月吉旦／板行」、但し「旦」以下三字は後印か。明暦元年は一六五五年。ここまでは整版である。

以下は写本。中扉があり「在名類例鈔／系圖／太平記在名名字／暦日取等／軍器／軍法」と墨書。改丁して八丁分に、「太平記之時代帝系略圖」「南帝之年號」「北条家之系圖」「新田足利之系圖」「新田之系圖」「足利之系圖」「仁木之統」を書く。これは『太平記系図』〔国文註釈全書第二巻〕所載の系図（四七五～四八一頁）に同じ。つぎに序文一丁あり。

今所用太平記者、慶長癸卯歳冨春堂新／刊也、夫温故而知新、可以為師兵、凡此書／者在名類例之抄書也、視之四十巻分于／四篇、以十冊為限連、其名字在名之類、欲／除繁重也、爰四角童蒙、欲知古安危便于／彼記、在々所々倭訓、未分明鳴學未之如／何今也、匡八極求九夷、或間（問）敷嶋之道、往／人或窺名所之　勅撰集名字名而、訓同」文字均而釈異、且習風俗将云誤就于謬／旡不記之、是両之師而至宝也、可巻而装／之若飾、則将泰平之標幟也、此書名曰在／名類例抄、

これは松平文庫蔵『太平記在名』巻頭にあるものに同じで、底本が慶長八年古活字本であることを示す。

以下内題「太平記一巻之在名并名字」とし、地名を列挙する。用字漢字、一面八行、三段書き、注は小字、ルビは片仮名。内容は『太平記系図』〔国文註釈全書第二巻〕に同じ。「暦日取等」以下、兵法関係記事二二丁あり。末尾に「以林白水之本謄録」と記す。林白水は江戸初期の京都の書肆出雲寺和泉掾の二代目、時元の隠居後の名。宝永元年

（一七〇四）九月一四日没。京都・江戸に出店し林家に出入りし修史事業に協力した。宗政五十緒「書肆 出雲寺家のこと」（『国語国文』四九巻六号、一九八〇・六）、藤實久美子「書肆出雲寺家の創業とその活動」（『近世書籍文化論―史料論的アプローチ―』第一部第一章、二〇〇六・一、吉川弘文館）など参照。

〔目録〕『彰考館図書目録』（一九七七・一一、八潮書店）八六頁。

〔翻刻〕

・室松岩雄編『太平記抄　太平記賢愚抄　太平記年表　太平記系図』〔国文註釈全書第二巻〕（一九〇八・四、國學院大学出版部）所収の「太平記系図　全」（四七五～五〇九頁）。

26 水府明徳会彰考館蔵（太平記方域考・戦場考）

（整理番号、丑二二）【国フ32―17―3―1、32―17―3―2、紙E614】

写本一冊。

表紙（二八・二×二一・五）左肩に貼題簽「太平記方域考／戦場考」と墨書。右上に「丑　弐弐」の蔵書票を貼る。印記、一オ右下に「彰考館」（瓢箪型単郭朱文）。

前半一八丁は「太平記方域考」にあたるが内題なし。『太平記』中の地名を箇条書き風に挙げ、略注を記すもの。冒頭を引く。

山城／十八ノ四丁／梨間宿〔延元元年十一月二十一日上〈後醍醐帝〉幸芳／野而過梨間宿云々、名勝志云長池／町南有／奈嶋村〕十八ノ七丁／笠置〔在相楽郡南北笠置、／元弘元年後醍醐帝幸、具見上〕同丁／六波羅〔在南北六波羅、承久三年置／執権次第〕（以下数字墨滅）

巻丁数（『参考太平記』版本による）を示し、地名を国別に記し、簡単な注を記す。漢字片仮名交、一面八行。〔　〕内は小字双行。掲出の地名は巻一八以後、巻四〇まで。抹消・追記・押紙あり、草稿の体なり。

後半二五丁は「戦場考」、中扉の左肩に打付け書「戦場考」、中央下に「葉數用写本」とあり、右下に「自初巻至十七」と記した押紙あり。本文冒頭丁を引く。右下に「葉數用写本」と記し、以下地名を挙げ、注は小字双行、巻丁を付す（〔　〕内）。

山城／法勝寺〔圓観法親王／居之一ノ十九〕、小野〔文観所居／一ノ十九〕、御室／〔寛性法親王／居之一ノ二十一〕

こちらは巻一から一七までの地名を国別に追い込み形式で記す。漢字片仮名交、一面八行。これも草稿らしく、終り近くの「淡路」の欄上に「末紀伊コヽヘ／可書」、「肥後」の欄上に「末ノ肥前コヽヘ／可書」、などとある。

〔目録〕『彰考館図書目録』（一九七七・一一、八潮書店）八六頁。

27 島原図書館松平文庫蔵（太平記在名）

（整理番号　一一三・五）【国フ358―47―5】

江戸前期写本一冊。

原装茶色表紙（二九・五×一九・九糎）の中央に打付け書「太平記

在名」（朱書）。一面一一行、三段書き、注は双行小字。漢字、楷書。朱丸・朱引あり。裏打ち補修あり。印記「島原秘蔵」（長方形双郭朱文）、「尚舎源忠房」（長方形双郭紺色文）、「文／庫」（横長楕円形双郭白文）。

一オに彰考館蔵の『在名類例鈔』所載と同じ序文あり。本書の内容は彰考館蔵の『在名類例鈔』の整版本および写本部分に同じく地名を列記し略注を記すが、系図部分はない。

〔目録〕『肥前島原松平文庫目録』（一九七二・一〇再版）九六頁。

28 島原図書館松平文庫蔵（太平記人名）

（整理番号　一一三・四）【国フ358－47－4】

江戸前期写本一冊。

薄茶横縞模様表紙（二七・二×一九・九糎）。左上に題簽「太平記人名」と記す。一面八行、漢字草書体。印記、前書に同じ。内容は登場人名の実名をあげ、名字・通称・官職などを注記する。例えば「国長　多治見四郎次郎／資朝　日野中納言」など。

〔目録〕『肥前島原松平文庫目録』（一九七二・一〇再版）九六頁。

＊（未完、以下（下）は『奈良大学大学院研究年報』第十三号に掲載予定）。

A Consideration on the Bibliography of the Transcript Versions of *Taiheiki-Nukigaki* (I)

Shigeyuki Nagasaka